

1 本発表の分析対象、目標および主張

開始を表す複雑述語「V-始める」「V-出す」「V-かける」「V-て来る」を対象とし、それぞれの表す意味を形式化する。具体的には、命題の意味のみを持ち、視点が未指定であり、推意を持たないアスペクト専用の「-始める」が開始を表すデフォルト的な表現であるのに対し、「V-出す」「V-かける」「V-て来る」ではそれらの情報がさらに細かく指定されていることを示す。その過程で、少なくとも当該現象において「意図性」をプリミティブな素性として設ける必要はなく、「視点」の値から間接的に読み込まれること、推意の値は、基体動詞の意味や、命題の意味に対する解釈的意味として導出することを示唆する。

本発表の主張

- -始める：イベントの開始を表すデフォルト的・中立的表現。
- -出す：補部となる出来事を専ら客観的に見ること、開始時点に視点を置くことが指定されているので、主観的表現とは相性が悪く、「不測性」「即興性」等を表しやすい。
- -かける：瞬間動詞につくと開始(=終了)直前(ex. 着きかける)を表し、それ以外は開始直前・直後で曖昧性が生じる(Bando & Hidaka 2017)。また、Bando & Hidaka (2017)は、「直前」のうち、イベント開始時が観察可能なものをアスペクト的、観察不可能なものをモダリティ的とする2つの語彙登録を仮定し、それぞれ異なる統語構造を取ると主張する。本発表では、視点が「客観」の場合はアスペクト的、「共感視点(EF; Empathy Focus (Kuno & Kaburaki 1977))」の場合はモダリティ的「-かける」と対応する。また、「-かける」は動作開始後に中断する(寺村 1969)慣習的推意を持つ(Bando & Hidaka 2017)が、それは、本動詞の意味から導出する。
- -て来る：必ずしもデキゴトの開始時に言及する必要はない(溶けている途中の水を発見して「溶けて来た」と言える)が、観察時に開始時が含まれる場合には開始を表せる。また、話者(のEF)が変化の終結点(GOAL)に視点を置いて観察することが指定されており、そこから推意が導出する。

	補部イベント	指す補部イベントの時点	視点	推意
-始める	incremental transition /activity	開始以降の1点	未指定	無し
-出す	incremental transition /activity	開始時	客観	(不測性、即興性)
-かける	-state	開始直前/開始直後	客観 / 話者・EF (主体)	中断
-て来る	incremental transition	開始以降の1点	話者・EF (GOAL)	expectation

2 意味表示

動詞の意味表示：Pustejovsky (1995) を修正した Hidaka (2011) および Arai & Hidaka (2013) を用いる¹。

$$(1) \left[\begin{array}{l} \text{ARGSTR} = [\text{統語構造における項}] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: 時間的特性, 視点に関する情報} \\ \text{CONST: 語彙概念構造 (LCS)} \end{array} \right] \\ \text{NTS} = \left[\begin{array}{l} \text{TELIC: その動詞が持ち得る結果状態} \\ \text{TRIGGER: その動詞が成立するための外的要因} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

動詞の時間的特性：Igarashi & Gunji (1998), 郡司 (2004) (「復帰」は議論に直接関係しないので以降省略する。)

$$(2) \quad s : \text{行為開始時点} \quad f : \text{行為完了時点兼状態開始時点} \quad r : \text{状態終了時点}$$

*本研究は、JSPS 科研費課題番号 16K02652 「動詞の多義性と文法化の理論的記述・分析—命題の意味、非命題の意味、視点の意味—」(2016年度~2019年度, 研究代表者: 日高俊夫) の助成を受けている。

¹TS は命題の意味を構成する部門 (Truth Conditional Section), NTS は非命題の意味を構成する部門 (Non-truth-conditional Section) を表す。

- a. 着る: $s < f < r < \infty$
($s < f$: activity $f < r$: 行為完了時点で状態変化 $r < \infty$: 行為前状態への復帰)
- b. 死ぬ: $s = f < r = \infty$
($s = f$: achievement $f = r$: 行為開始時点で状態変化 $r = \infty$: 行為前状態への復帰なし)
- c. 歩く: $s < f = r < \infty$
($f = r$: 状態変化なし, 行為完了時点がそのまま状態終了時点)

3 分析

3.1 V-始める

- (3) 「-始める」²
 - a. 補部イベントのタイプ: incremental transition / activity (一定の時間幅を持つイベントの開始を示す)
 - b. 指し示す時点: 補部イベントの開始以降の1点 (開始時でも、一定範囲であればそれ以降の時点でも良い)
 - c. 視点: 指定なし (EF 視点からの描写も客観的描写も可能)
 - d. 推意: なし (以前、以後の状態等について言及しない)

■ 意味的選択制限

- (4) 「-始める」は非対格動詞にも問題なく接合するのに対し、「-終わる」は非対格動詞とは接合しない。
 - a. 雪が降り始めた。
 - b. *ようやく雪が降り終わった。cf. ようやく雪が降り終わった。
- (5) 意図的な用法を持つ「走る」においても、主体に意図性が感じられにくい場合は容認性が落ちる。
 - a. ラジコンカーがそのコースを走り始めた。
 - b.?*ラジコンカーがそのコースを走り終わった。
- (6) 漸増的变化 (incremental transition) あるいは活動 (activity) を表す動詞句を補部とし、基本的に瞬間動詞や状態動詞は取らない。
 - a. 氷が溶け始めた。
 - b. ケンが話し始めた。
 - c. *ケンが駅に着き始めた。cf. 学生が駅に着き始めた。
 - d. *ケンが家に居始めた。

開始時も、開始からある程度経った時点も指すことができる(「一瞬」を表す副詞的表現とも問題なく共起するので、開始部分を指すとする池谷(2002, 2017)とは若干異なり、池谷の制約は幾分強すぎるように思われる)。

- (7) a. ケンが英語を勉強し始めた。
- b. {その瞬間/突然}, 宇宙が膨張しはじめた。

むしろ、表のように、「-始める」は、補部イベントが選択制限に合致する限り、「-出す」「-かける」「-て来る」を包含する適用範囲の広さを持つとする方が妥当であろう。つまり、「-始める」は、開始を表すデフォルト的表現と位置付けられ、これは「-始める」が元々アスペクト専用動詞であることからの帰結であると思われる。一方、他の3つの場合、元々アスペクト表現でなかったものが文法化等を経てアスペクトを表すようになって、基体動詞の意味によって、「-始める」よりもより特定の意味を表すと考えられる。

■ 意味表示

² 「V-始める」の「-始める」は、本動詞の「始める」と異なり、意図性のない動詞にも接合するので、とりあえず本動詞とは異なる語彙登録を持つ(補助)動詞であると想定して議論を進める。

$$(8) \left[\begin{array}{l} \text{-hazime} \\ \text{ARGSTR} = \boxed{\square} \text{ vP/VP [FORMAL: } s < f = r \vee s < f < r \text{]} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: POINT: hazime}(\boxed{\square}) = p, \\ \text{where } s \leq p \wedge \text{DIS}(s, p) < \text{DIS}(p, f), p \in \boxed{\square} \\ \text{VIEW: } \phi \\ \text{CONST: } \phi \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

- (9) a. **POINT** : 補部イベントのどの時点を見るか。
 b. **VIEW** : 補部イベントをどのように見るか。
 c. **DIS** : イベント内での時点間や、イベント内での時点と話者や EF の心理的距離を算出する関数。

3.2 V-出す

■ 姫野 (1999) : 「-出す」と「-始める」を比較し、次のような記述的観察を提示

- (10) a. 感情を表す語は「-出す」の方が適している
 b. 不測性を強調する場合は「-出す」の方が適している
 c. 音の自然発生を表す場合は「-出す」の方が適している
 d. 「今にも～しそうだ」という現実化直前の様相を表す表現で、自然現象の場合は「-出す」の方が適している
 e. 表現上のニュアンスとして、即興性やエネルギーの爆発等が強調される場合は「-出す」の方が適している
 f. 「-出す」は意志表現にそぐわない
 g. 形態上の制限から前項に「出す、始める」が来る場合は、同音反復をさける。

■ 池谷 (2002, 2017) : (10) のうち、形態上の問題である (10g) を除く問題をまとめて一般化

- (11) a. 感情を表す語は「-出す」の方が適している → (10a)
 b. 「-出す」は「突然性」「不規則性」「即興性」を含意しやすく、音や自然現象を表すのに適している。 → (10b,c,d,e)
 c. 「-出す」は意志表現にそぐわない → (10f)

(12) 出す :

- a. 運動が開始した瞬間の局面を表す。
 b. それまで存在しなかった新たな状態が起こったことを表す。
 c. その運動が継続して行われるかは含意しない。

始める :

- d. 「始-続-終」という一連の運動の開始を表す。
 e. 運動全体から計算した最初の部分を表す。
 f. その運動は継続して行われることが期待されている。

(12f) については、次のように開始後にその動作等をキャンセルしても容認性が落ちることはないので、「-始める」にはそのような意味が指定されているとは考えにくいように思われる。

- (13) その機械は動き始めた直後に止まってしまった。

■ 陳 (2013) のアスペクトの「-出す」 : [BECOME [[LCS1] BE AT-SUDDEN START]]

■ 本発表における意味表示 : 先行研究の主な洞察を次の観点でまとめ、形式化することにより、さらに一般化する。

(14) 「-出す」

- a. 補部イベントのタイプ : incremental transition / activity

- b. 指し示す時点：補部イベントの開始時
- c. 視点：客観
- d. 推意：(不測性、即興性)

$$(15) \left[\begin{array}{l} \text{-das} \\ \text{ARGSTR} = \boxed{\square} \text{ VP [FORMAL: } s < f = r \vee s < f < r \text{]} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: POINT: das}(\boxed{\square}) = p, \\ \text{where } p = s, p \in \boxed{\square} \\ \text{VIEW} = \text{OBJ}(\boxed{\square}) \\ \text{CONST: } \phi \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

■ POINT の値 ($p = s$) から導出すること (池谷 (2002, 2017) も同様のことを言及)

- 「突然性」「不測性」「不規則性」「即興性」(姫野 1999, 池谷 2002, 2017)：「-出す」が見るのは補部イベントの開始のみ。そのため、場合によっては突然そのイベントが起こったような意味合いが生じる。しかしながら、(16) が示すように、常にそのような「不測性」「即興性」を表す訳ではない(したがって「不測性」等は動詞の命題的意味を表す LCS のレベルにある訳ではないので、陳 (2013) の記述は強すぎるように思われる)。

- (16) a. 息子には以前から勉強するように言っていたが、試験二日前になってようやく勉強し出した。
b. 蒸気機関車がゆっくりと走り出した。

- (17) 開始時点が分かりにくい場合は容認性が落ちる。
a.*飛行機が飛び出した。(池谷 2017) cf. 飛行機が飛び始めた。
b.*街路樹の葉が落ち出した。cf. 街路樹の葉が落ち始めた。
c. 桜が咲き出した。/ 鉢植の月下美人が先ほど咲き出した。/ ?鉢植の一輪のバラが咲き出した。
d.*山道のドライブで気分が悪くなり出した。cf. 山道のドライブで気分が悪くなり始めた。

■ VIEW (\square) = OBJ (\square)：共感焦点 (Empathy Focus; EF (Kuno & Kaburaki 1977)) を取れず、専ら事象を客観的に描写することを指定³。

- 池谷の分析通り、命令文や 1 人称文は容認されにくい⁴。つまり、命令文との相性が悪いのは、「出す」が専ら客観的(傍観的)な視点を持つ(このことは池谷自身も言及しており、今井 (1993) も同様の主張をしている)ため、主体の意図にアクセスできないということが理由であると考えられる。
- 主体の意図に言及する必要のない、(電車に向かって)「早く動き出せ」のような命令文は可能。
- 音や自然現象は、客観的に観察できることが多いので「-出す」とは比較的相性が良い。(11b)
- 1 人称でも、客観的に観察可能な過去の出来事には「-出す」を用いることができる。
- 「意思表現にはそぐわない」(11c)のは、客観的視点を取ることが指定されているため。
- 「感情を表す語」(11a)の中でも、「-出す」が選択できるのは、客観的に外部から観察可能な「喜ぶ」「悲しむ」等に伴う動作を指す場合である。

- (18) a. 命令文：*早く食べ出せ。cf. 早く食べ始めろ。
b. 願望的命令文：(電車に向かって)早く動き出せ。
c. 一人称現在：?*私は毎日 9 時に勉強し出す。cf. 私は毎日 9 時に勉強し始める。
cf. 彼は毎日 9 時に勉強し出す。cf. 彼は毎日 9 時に勉強し始める。
d. 一人称過去：?(何を思ったか)私は昨日は 8 時に勉強し出した。
cf. 私は昨日は 8 時に勉強し始めた。
e. 意思表現：?*ケンは今夜 12 時に論文を書き出すつもりだ。
cf. ケンは今夜 12 時に論文を書き始めるつもりだ。

³ 「-出す」と同様に「客観」の値が指定されている表現としては「寒がる」等の「-がる」等が挙げられるだろう。逆に「EF」が指定されているものとして「つもりだ」「寒い」等がある。日本語全般として、どの程度の数の表現に「客観」「EF」等の指定がなされるべきかという問題は今後の課題としたいが、本発表における VIEW という項目は、日本語を記述する際には必要なものであると考える。

⁴ 池谷 (2017) では、「-出す」は「開始した瞬間の局面のみを表すため、動詞の終わりが視界に入っている限界性 [+ delimited] を持った動詞について場合、意味的に矛盾するため命令形にしにくい」としているが、肯定文においては、「蟻が(その場で)巣を作り出した」のような限界性のある動詞句についても用いられ、また、命令文でも「今すぐ論文を書き出せ」や「合図したらこの歌を歌い出せ」のような「限界性」を持つ動詞句を取ることはできるので、「限界性」の概念そのものは「出す」と直接関係していないように思われる。

3.3 V-かける

■ 意味的選択制限と解釈の曖昧性

「-始める」「-出す」「-て来る」と異なり、瞬間動詞にも接合できる(その場合「直前」を表す)が、純粋な状態動詞には接合できない。

- (19) a. 駅に着きかけた(ところで事故に遭った)。cf. *ケンが駅に着 { 시작했다/き出した/いて来た }。
 b. *山がそびえかけた。

Bando & Hidaka (2017)

瞬間動詞につくと開始(=終了)直前(ex. 着きかける)を表し、それ以外は開始直前・直後で曖昧性が生じることを指摘している。そして「直前」のうち、イベント開始時が観察可能なものをアスペクト的、観察不可能なものをモダリティ的とする2つの語彙登録を仮定し、それぞれ異なる統語構造を取ると主張する。表では、視点が「客観」の場合はアスペクト的「かける」、「話者・EF(主体)」の場合はモダリティ的「かける」と対応する。

- (20) a. 電車が駅に着きかけた。(開始(=終了)直前/観察可能)
 b. ケンが走りかけた。(開始直前・直後・観察可能)
 c. ケンは走りかけた。(開始直前・観察不可能 / 開始直後・観察可能)
 d. ケンが夕食を作りかけた。(開始直前・観察可能)
 e. ケンは夕食を作りかけた。(開始直前・観察不可能 / 開始直後・観察可能)
 f. ケンが驚きかけた。(開始直後・観察可能)
 g. ケンは驚きかけた(が態度や表情には全く出さなかった)。(開始直前・観察不可能)

また、「V-かける」は動作開始後に中断する(寺村 1969)慣習的推意を持つ。

- (21) a. ?ケンが山に登りかけ、その後登頂した。
 b. ケンが山に登りかけたが、(??1時間登って)やめた。

■ 意味表示 (Bando & Hidaka (2017) を改定)

(22) 「-かける」

- a. 補部イベントのタイプ: -state
 b. 指し示す時点: 開始直前/開始直後
 c. 視点: 客観/話者、EF(主体)
 d. 推意: 中断

(23) MAP (Minimal Approved Point; 初回最短承認時点): 動詞句が描く出来事が最初に生じたと承認できる最短の時点

$$(24) \left[\begin{array}{l} \text{-kake}_{Asp} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \square \text{ VP/VP [FORMAL: } s < f = r \vee s = f < r \vee s < f < r \text{]} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: POINT: kake}(\square) = p, \\ \text{where } p \leq \text{MAP}, p \in \square \\ \text{VIEW: OBJ}(\square) \end{array} \right] \\ \text{CONST: } \phi \\ \text{NTS} = \left[\text{TRIGGER: HANG}(\square, \square, \text{at } p) \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

MAP が観察不可能な場合、MAP そのものの時点が明らかにならないので、イベントの開始前に視点を移さざるを得ない($kake_{Mod}$)。

$$(25) \left[\begin{array}{l} \text{-kake}_{Mod} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \square \text{ TP [FORMAL: } s < f = r \vee s = f < r \vee s < f < r \text{]} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: POINT: kake}(e) = p, \\ \text{where } p < \text{MAP}, p \notin \square \\ \text{VIEW: EF}(\square) \end{array} \right] \\ \text{CONST} = \phi \\ \text{NTS} = \left[\text{TRIGGER: HANG}(\square, \square, \text{at } p) \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

- (26) 健は山に登りかけ、しばらくしてまた登りかけた。
- 2度目は1度目に登った時点から登った。
($p = \text{MAP}$) → 山に登りかけ、またそこ(中断した地点)から登りはじめた。
 - 2度目もまた最初の時点から登った。
($p < \text{MAP}$) → 山に登りかけ、またはじめから登りはじめた。
- (27) 寺村(1969)の「或る動作が始まって、直後に何なのか(何ごとか)によって中止させられるという場合が多い」: conventional implicature (慣習的推意) → TRIGGER (主体役割) の値(「その時点で補部イベントをぶら下げて固定する」のような意味)から導出

3.4 V-て来る

- (28) 「-て来る」
- 補部イベントのタイプ: incremental transition
 - 指し示す時点: 補部イベントの開始以降の1点
 - 視点: 話者(のEF)が事象の到達点から見ることを指定
 - 推意: expectation
- (29) expectation: 多かれ少なかれ補部イベントで表される変化が起きることが予測されている。
→ 予測に反する意味の副詞的表現とは相性が悪い。
その氷は思いがけず溶け { 始めた/出した/?て来た }。

- (30)
$$\left[\begin{array}{l} \text{-tek} \\ \text{ARG} = [\square \text{ VP [FORMAL: } s < f < r \text{]}] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: } \left[\begin{array}{l} \text{DIS}(EF, \text{Loc}(e, f)) = 0 \\ \text{POV}(p): \text{POINT: -tek}(\square) = p \\ \text{where } s \leq p \wedge \text{DIS}(s, p) < \text{DIS}(p, f), p \in \square \end{array} \right] \end{array} \right] \\ \text{CONST: } \phi \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

推意: 話者(のEF)が変化の終了時点からイベントを見るため、イベントの表す変化が最終的にそこまで及ぶと期待されることから導出。

4 まとめ

参考文献

- Arai, F. & Hidaka, T. (2013). A Formal Analysis of Japanese V-yuku and its Grammaticalization.. Paper presented at the 23rd Japanese/Korean Linguistics Conference, October 11–13, Massachusetts Institute of Technology, Boston, MA, the United States of America.
- Bando, M. & Hidaka, T. (2017). Ambiguous Syntactic V-kake Compounds. *KLS*, 37, 157–168.
- Hidaka, T. (2011). *Word formation of Japanese V-V compounds*. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.
- Igarashi, Y. & Gunji, T. (1998). The temporal system in Japanese. In Gunji, T. & Hashida, K. (Eds.), *Topics in constraint-based grammar of Japanese*, pp. 81–97. Kluwer.
- Kuno, S. & Kaburaki, E. (1977). Empathy and Syntax. *Linguistic Inquiry*, 8, 627–672.
- Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. MIT Press.
- 池谷知子 (2002). 「複合動詞「～出す」と限界性」. *KLS*, 22, 192–202.
- 池谷知子 (2017). 「開始を表す複合動詞「～出す」「～始める」の違い—コーパスを使用した使用実態から—」. *TALKS: Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin*, 20, 35–59.
- 今井忍 (1993). 「複合動詞の多義性に対する認知意味論によるアプローチ: 「～出す」の起動の意味を中心にして」. 『言語学研究』, 12, 124.
- 郡司隆男 (2004). 「日本語のアスペクトと反実仮想」. *TALKS: Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin*, 7, 21–34.
- 陳劼懌 (2013). 「語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性について—『～出す』を対象として」. 影山太郎 (編), 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』, p. 4774. ひつじ書房.
- 寺村秀夫 (1969). 「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト—その一—」. 『日本語・日本文化』, 1, 32–48.
- 姫野昌子 (1999). 『複合動詞の構造と意味用法』. ひつじ書房.